

+ 18 【かいごん】

ぼくの家は隣の、鬼兵さんの家です。

隣とはいえ、すくなくとも三百米は離れているのですが。

鬼兵さんの家は、ぼくの家とどっこいどっこのあばらやです。

名前はこわいですが、鬼兵さんは昔から優しいから、村びとたちに、「仏の鬼やん」

と呼ばれていました。

独身ですから一人住まいで、仕事は何十年も修繕屋（しゅうぜんや）をやっていました。

傘や靴から鍬（くわ）やこたつまで、とても安い値段で、なおせるものはなんでもなおすということでした。

この鬼やんが八十歳を越えたときに、脳硬塞（のうこうそく）で倒れて、命は取り留めたのですが、右手と右足がまったく動かなくなりました。

みんな心配していましたが、あるとき隣村から若い姪がやってきました。

「あれは姪じゃのうて、鬼やんのお手付きの女じゃ」

と村びとはいいますが、ぼくはやっぱり姪だとかんがえていました。

なぜなら鬼やんはぼくよりも女嫌いで、そのことをぼくだけは知っていたからでした。

それでも親切な姪の世話は、ありがたがって素直に受けていました。

半年くらい経つと、鬼やんの家から鬼やんの叫び声やうなり声が、たびたび聞こえるようになります。

いくら離れていても、ぼくの村の場合は、風が運んでくるのです。

だから三百米くらいなら、おちやのこさいさいです。

「あれはなんじゃ」

ぼくは母親にききました。

「あれは鬼やんの声だよ」

「そんなことはわかっちゃる。あれはどうしたわけなんじゃ」

「鬼やんが姪にやられてるのさ」

母親は気の毒そうにこたえました。

「なにをやられとるんじゃ」

「あれこれ、ひどい目にあっているんだよ」

「あれこれじゃわからん」

「想像してみなさいよ」

母親はいいたくないという表情でした。

「だって、めんどろみとるんじゃないのか」

「そうだよ。めんどろみるってことは、ひどい目にあわせるってことなのさ」

そいつは知らなんだ。

「まるで、おぼけとおなじやりかたじゃのう」

「村のひとたちは、あの姪のことを【かいごん】とよんでこわがっているよ」

母親もこわがっている様子でした。

「だから、とめないのかい」

「そんなことしたら【かいごん】に、鬼やんと同じ目にあわされるからね」

「そらあ、たまらんのう」

ぼくは懐爺のところへ行き、【かいごん】のことをききました。

「【かいごん】というおぼけは、新しいというか、戦後はじめて登場したおぼけですね。戦前は親や年寄りの面倒を見たり世話をするのは、当たり前前で、女の人はずっとそういう仕事をやってきたのです。けれども今は女の人が強いですからね、面倒を見たり世話をしてもいいけど、見返りがほしいって人が大半になってきました。その見返りがなければと判ると、【かいごん】に豹変してしまうんですね。年寄り受難（じゅなん）の時代ですよ」

見返りとは、金銭のことだとぼくはかんじました。

となると、戦後も現代も同じというわけです。

「そういうの、しごとにしとるひと、おらんのか」

「いくらかはおるんですよ。おるんですが、仕事が報酬（ほうしゅう）と釣り合わない、つまりお給料が安いと感じてしまうと、やはりおそろしい【かいごん】に豹変します」

「おにやんのところの、めいは【かいごん】じゃな」

「そういうことになります。早く【かいごん】を退治しないと、鬼やんは殺されてしまいますよ」

「どうやって、たいじするんかのう」

懐爺はしばし腕組みをしていましたが、

「むずかしいのは【かいごん】を追い出すと、鬼やんの面倒を見るひとがいなくなります。鬼やんは姥捨山（うばすてやま）に行かなければなりません」

「どうすりゃいいかのう」

「いま薬を調合（ちょうごう）しますから、それを何とか鬼やんと【かいごん】に飲ませてください」

「わしにやれるかのう」

こんどはぼくが腕組みをしていると、懐爺は祠の奥に消え、しばらくしてもどってきました。

ぼくは懐爺から二種類の薬を受け取りました。

「いいですか。黒い器が鬼やんのもの、赤い器が【かいごん】のもの。おまちがえのないように」

まちがえるなといわれると、かえって緊張（きんちょう）する。

「くろは、おにやん、あかは、【かいごん】。あかは、あかおに、くろは、はらぐろ。いんや、たぶん、ぎゃくじゃ。くろうするな、あかんあかん」

つぶやきながらぼくは、鬼やんの家に行き、

「えらいおいしゃさんにもらったくすりじゃ。これをのまんとはちがあたるぞ」

といて、ふたりに渡しました。

何のばちかはいいませんでしたが、ふたりにはわかっている様子でした。

けれどもどういわけか（いや、たぶんぼくがまちがえたために）鬼やんは赤い器を【かいごん】は黒い器のくすりをのんでしまいました。

すると翌日から、鬼やんの叫び声やうなり声が、まったくきこえなくなりました。

数日して、こっそり鬼やんの家の中をのぞいてみると、鬼やんと【かいごん】が、仲よさそうに食事をしていました

また数日して、鬼やんは【かいごん】（いや、姪）の助けを借りて修繕

屋を再開しました。

(こうしてふたりは幸せに暮らしました)

あとで懐爺にきくと、

「黒い器は精力剤（せいりょくざい） 赤い器は媚薬（びやく）です」

精力剤は何となくわかったものの、媚薬のほうはおとなになるまでわかりませんでした。

どちらにしろ、まちがえてよかったんだとぼくはおもいました。